

他資格の国家試験の状況及び検討に当たっての考え方

他資格の国家試験の状況	検討に当たっての考え方（事務局作成）
<p>1. 国家試験の出題範囲</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他の資格における試験の出題範囲については、科目を明確に定めているもの（看護師、言語聴覚士など）と、科目は定めずに当該資格を有するために必要な知識及び技能全体を出題範囲として定めているもの（医師、公認心理師など）がある。 ・ 愛玩動物看護師法においては、看護師、言語聴覚士と同じく、法第 39 条で試験科目を農林水産省令・環境省令で定めることとされている。 ・ 他の資格では、試験科目を定めるか否かに関わらず、出題基準が作成されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 科目を明確に定めている他の資格では、履修科目から実習科目を除いたものを試験科目として規定していることから、これに倣い、試験科目を規定してはどうか。 ・ 国家試験は、愛玩動物看護師として必要な知識及び技能を備えていることを確認するものであることから、本検討会で決定する到達目標を踏まえ、指定試験機関が出題基準を作成することとしてはどうか。
<p>2. 国家試験の出題方式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 獣医師や医療関係職種の国家試験では、論述式の筆記試験（論述試験）や実技試験は課しておらず、マークシート式の筆記試験を実施している。 ・ 論述試験や実技試験では、評価基準の作成が困難であることや、採点者による点数のばらつきが生じる可能性があること等、合否決定に当たって客観性を担保できるか否かが課題となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣医師や医療関係職種の国家試験では、現在、迅速かつ公正な採点が可能なマークシート式が採用されていることを踏まえ、愛玩動物看護師国家試験もマークシート式の筆記試験としてはどうか。

3. 国家試験の問題の性質

【必須問題】

- ・ 獣医師、医師、看護師の国家試験では、必須問題*（必修問題）が導入されている。

※ 当該資格保有者として特に重要かつ基本的な事項を問う問題

【実地問題】

- ・ 獣医師、医師、看護師、公認心理師の国家試験では、実地問題*（臨床実地問題、状況設定問題、事例問題）が導入されている。

※ 現場で実際に起こり得る症例・事例に対する対処方法等の総合的な事項を問う問題

【禁忌肢】

- ・ 医師国家試験では、禁忌肢*が導入されている。

※ 生命や臓器機能の廃絶に関わるような解答や倫理的に誤った解答を一定数選択すると、他の問題の点数に関わらず、不合格となる。

- ・ 看護師国家試験では、禁忌肢の導入により国家試験に対する社会的信頼性が高まると考えられる一方で、看護倫理に反する者や明らかに死に至らしめるような行為を行う者を禁忌肢で選別することは困難であることから、禁忌肢の導入は見送られている。
- ・ 獣医師国家試験では、獣医師の資質に欠ける受験生の識別は、必須問題で補完できるものとして、禁忌肢の導入は見送られている。

【必須問題】

- ・ 獣医師、医師、看護師の国家試験では、国家試験の改善を行う中で導入された経緯がある。愛玩動物看護師には、安全第一なサービスを提供するための正確な知識と技術、飼い主との良好なコミュニケーションを図るための能力等が求められていることを踏まえ、これらを客観的に評価するための必須問題を導入してはどうか。

【実地問題】

- ・ 獣医師、医師、看護師、公認心理師の国家試験では、総合力や応用力の評価を目的に実地問題が導入されていることから、愛玩動物看護師も実地問題を導入することを検討してはどうか。

【禁忌肢】

- ・ 禁忌肢については、獣医師や看護師の国家試験においてその取扱いに変更があった場合、導入を検討することとしてはどうか。

4. 国家試験の試験日数・問題数

- ・ 獣医師や医療関係職種¹の試験日数・問題数については、以下のとおり。

獣医師： 330 問 530 分（2 日間）

医師： 400 問 820 分（2 日間）

看護師： 240 問 320 分（1 日間）

言語聴覚士：200 問 300 分（1 日間）

公認心理師：154 問 240 分（1 日間）

【必須問題の出題数】

獣医師 50 問（21 年度～）

医師 30 問（8～11 年度）

100 問（12 年度～）

看護師 30 問（15～20 年度）

50 問（21 年度～）

【実地問題の出題数】

獣医師 120 問（全体の 36%）

医師 200 問（全体の 50%）

看護師 60 問（全体の 25%）

- ・ 獣医師や医師の実地問題では、診療現場で実際に起こりうる症例に対する診断名を問ひ、その診断がついた上でどのような治療や検査を行うかを問う問題が出題されている。
- ・ 一方、看護師については、看護の現場で直面しうる状況を設定し、それに対する理解力・判断力を問う問題が出題されている。

- ・ 試験日数・問題数については、教育年限が同等（3 年以上）の看護師（240 問、1 日間）、言語聴覚士（200 問、1 日間）を参考に検討してはどうか。

【必須問題の出題数】

- ・ 必須問題を導入することとし、その出題数の目安については、獣医師、看護師の現行の出題数（50 問）を参考に検討してはどうか。

【実地問題の出題数】

- ・ 実地問題を導入することとし、その割合の目安については、獣医師や医師のような診断等の臨床能力を問う問題は出題できないことから、看護師（全体の 25%程度）を参考に検討してはどうか。

5. 国家試験の合格基準・配点

- ・ 他の資格における合格基準・配点については、以下のとおり。

【合格基準】

- ① 問題の性質を問わず全体の正答率（得点率）で合否を判断するもの（言語聴覚士、公認心理師）と問題の性質に応じてグループ化し、基準となる正答率をそれぞれ設定し、それに基づいて合否を判断するもの（獣医師、医師、看護師）がある。
- ② 問題の性質を問わず合格基準に絶対基準を用いるもの（獣医師、言語聴覚士、公認心理師）と必修問題には絶対基準、それ以外の問題には相対基準※を用いるもの（医師、看護師）がある。
- ③ 上記に加え、禁忌肢の選択が一定数以下であること等を合格基準の一つとするもの（医師）がある。

※ 平均点と標準偏差を用いた基準。受験生の得点分布により合格となる得点率は変動。

【合格基準】

- ・ 獣医師、医師、看護師を参考に、必須問題とそれ以外の問題とに分けて基準となる正答率を設定してはどうか。
- ・ 必須問題を導入しない場合は、試験科目ごとに設定することが想定されるが、いずれの試験科目も重要であることから、全体の正答率で合否を判断してはどうか。
- ・ 合格基準については、絶対基準を用いることとしてはどうか。また、医師や看護師で導入されている相対基準については、受験生の得点分布が正規分布であることが明らかな場合であって、国家試験の難易度が安定しない等への対応が必要な場合に、導入を検討してはどうか。

【正答率（得点率）】

- ・ 獣医師や医療関係職種の合格となる正答率は以下のとおり。必須問題を設けている場合、必須問題の正答率は、それ以外の問題の正答率より高く設定されている。

獣医師：必須 70%、必須以外 60%

医師：必須 80%

必須以外 70%前後（相対基準）

看護師：必須 80%

必須以外 65%前後（相対基準）

言語聴覚士：60%（必須問題なし）

公認心理師：60%（必須問題なし）

【配点・時間配分】

- ・ 総合力や応用力を問う実地問題に重きを置く観点から、実地問題の配点を高くする考えがある一方、一般問題も実地問題も同程度に重要という観点から、配点を同一にする考えもある。
- ① 問題の性質を問わず 1 問 1 点とする。（獣医師）
 - ② 実地問題は配点を 1 問 2 点（看護師）又は 3 点（医師、公認心理師など）とする。
 - ③ 実地問題の配点は、回答時間（看護師は 1 問 2 分で配点 2 点、医師・公認心理師は 1 問 3 分で配点 3 点）に対応している。
なお、獣医師は、1 問 2 分で配点 1 点となっている。

【正答率（得点率）】

- ・ 獣医師を参考とし、必須問題の合格率は 70%、それ以外の問題の正答率は 60%を目安としてはどうか。
- ・ 必須問題を導入しない場合には、正当率は 60%を目安としてはどうか。

【配点・時間配分】

- ・ 実地問題を導入する場合は、実地問題の配点を高くすると、一般問題の正答率が低かったとしても合格基準を満たすこととなる懸念があることから、問題の性質を問わず 1 問 1 点としてはどうか。また、実地問題の回答時間は 2 分～3 分を目安としてはどうか。
- ・ 実地問題を導入しない場合は、1 問 1 点としてはどうか。

6. 予備試験について

- ・ 現在、現任者を対象とした予備試験を実施している医療関係職種等の国家資格はない。
- ・ 予備試験については、WTで整理した国家試験の出題範囲、出題方式、問題の性質、合格基準等を基準に検討を進めてはどうか。
- ・ 現任者にとって予備試験の受験が時間や費用面で大きな負担となること、及び予備試験は修学等の状況や実務経験の範囲（看護、愛護・適正飼養）に幅がある現任者が国家試験の受験資格に相当する知識及び技能を有することを担保する目的で行うことを踏まえ、予備試験の分量等は必要最小限とすることを検討してはどうか。
具体的には、問題数は国家試験の半数程度とし、試験日数は半日程度としてはどうか。
- ・ 予備試験では、国家資格を受験するために必要な、重要かつ基本的な知識を修得していることを確認することとし、出題範囲は国家試験と同等とした上で、重要かつ基本的な問題を中心に出题をすることとしてはどうか。
具体的には、必須問題と実地問題の2部構成とし、全体の正答率が60%以上であることを合格の基準としてはどうか。

以上